

PMMoV(TMV-p)抵抗性ピーマン品種「みおぎ」の肥大特性と収穫間隔	
[要約] ピーマンの収穫間隔が14日程度に長くなると収穫個数、M品率は減少するが、大果率が増加することから逆に総収量は増加する傾向がみられ、特に「みおぎ」では平均果重の増加が大きく、増収率が大きくなる結果が得られた。	
農業総合センター 鹿島地帯特産指導所	
キーワード	ピーマン, ミオギ, テイコウセイヒンシュ, シュウカク

1. 背景・ねらい

PMMoV(TMV-p)抵抗性品種「みおぎ」の作付けが増加し、鹿島地帯における主力品種となったが、従来の品種と較べ果実が大きくなる特徴がある。そこで、「みおぎ」「ニュー土佐ひかり」を用いて12月19日定植の加温半促成栽培で果実の肥大特性並びに収穫間隔と収量、規格別割合について検討した。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 総収量は、「みおぎ」、「ニュー土佐ひかり」共に14日間隔の収穫で最も多く、4日間隔が最も少なかった。各収穫間隔での収量は、「みおぎ」が「ニュー土佐ひかり」に較べやや多く、「みおぎ」の14日間隔が最高の収量だった。(図1)
- 2) 収穫個数は「みおぎ」、「ニュー土佐ひかり」共に4日間隔が最も多く、収穫間隔が長くなると収穫個数が少なくなる傾向がみられた。(図2)
- 3) 平均果重は収穫間隔が長くなるとほど重くなった。特に「みおぎ」は平均果重の増加が大きく、「ニュー土佐ひかり」が4日間隔で28.1g、14日間隔で35.7gに対して、「みおぎ」ではそれぞれ29.6g、40.3gだった。
- 4) 「みおぎ」、「ニュー土佐ひかり」共に収穫間隔が長くなるとM品率が減少し、バラL及び2L品率が増加した。特に「みおぎ」で2L品率の増加が目立った。
「みおぎ」は「ニュー土佐ひかり」に較べ各収穫間隔でのM品率が低く、全体に大果傾向だった。
- 5) 「みおぎ」、「ニュー土佐ひかり」共に果径は開花後8日目くらいから急速に肥大しタテ径、ヨコ径は、およそ37日で肥大がほぼ終わり、後は横這いとなった。果実タテ径ヨコ径は、両品種間で開花後26日目くらいから差がつき始め、最終的に「みおぎ」がタテ径5.6mm、ヨコ径6.4mm大きくなった。
果重は開花後20日目くらいから急速に増加し、およそ47日目に最高に達した。開花後20日目くらいから差がつき始め、最終的に「みおぎ」が23.3g重くなった。(図3)
- 6) 収穫間隔が長くなるほど収穫個数、M品率は減少するが、大果率が増加することから逆に総収量は増加する傾向がみられ、特に「みおぎ」では平均果重の増加が大きく、増収率が大きくなる結果が得られた。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 規格別単価、産地としての出荷方針を考慮し、生産者の出荷計画の参考資料とする。
- 2) 草勢が弱い場合、初期着果が多い場合は、早めに収穫して草勢を確保する。

4. 具体的データ

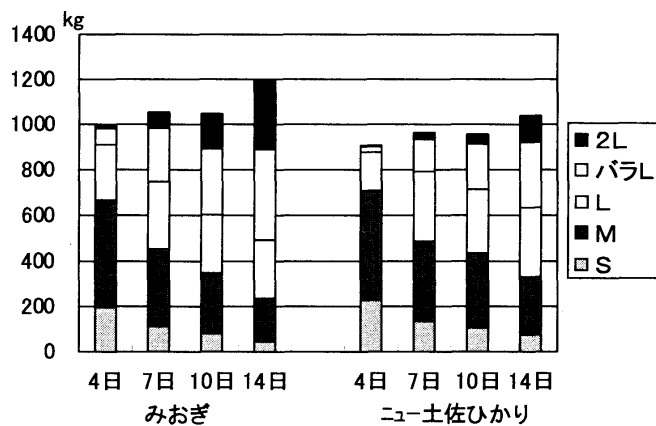


図1 収穫間隔と規格別収量 (kg/a) (収穫期間2月~7/5)

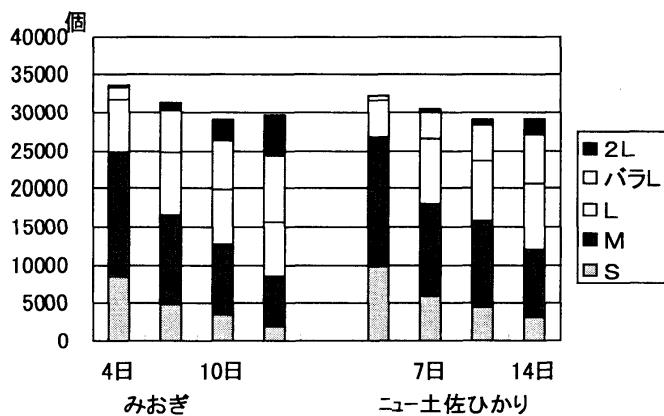


図2 収穫間隔と規格別収量 (個/a)

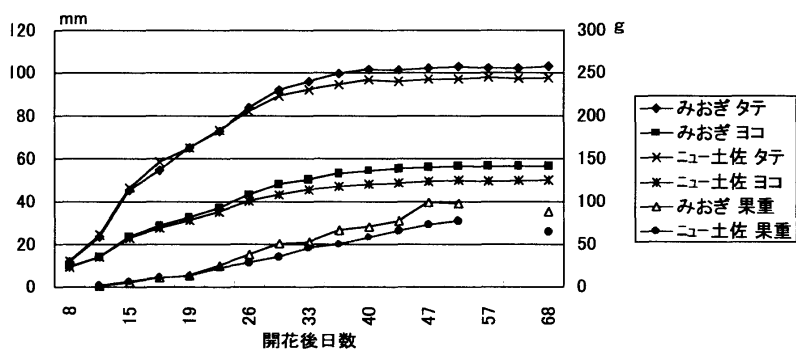


図3 果実の肥大

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

環境に配慮したピーマンの新資材利用, 養液栽培技術の開発・平成13~17年・鹿島地帯特産指導所